

遊女の身請といへる事、元よし原より起りて、今に年々絶ざるは、この大江戸のいやさかえにさかゆるありがたき、まゝなるべし、またこゝにあらはせるは、三浦や四郎左衛門が抱薄雲が身請證文なり、その頃揚や町和泉や半四郎なりがもとにて遊びける、市町の人たれとかいへる住所は、まらねど、むかしがたきなる人とみえて、文言などめでたきかきさま也けり、いまはみな人ごとに心もさかしければ、中々に加様の文體は、えもかゝざる事なれど、請出すほどの身がらなれば、行末こしかたをもおもひやりて、かくありたきものになん、

〔落標〕身請門出

身請定り門出の日、揚屋茶屋親方の親類知音の銘々へ、樽肴或は絹織物等相添祝儀となす、又もらひたる方よりも、それ〱の届事は、其後門出名残とて、家内一門一家寄あつまり、料理に結構をつくし、盃事ありて、揚屋より迎に來る乗物持せ來るも有、かるきは竹籠被すげ笠さま〱あり、夫より揚屋にて又盃事あり、此時なじみの女郎連、おもひ〱寄あつまり、見送の事どもあり、門まで賑々しく見送り、はなやかなりし事どもいふ計なし、此儀式は大臣の威勢次第にて、花美かぎりなし、

〔當世武野俗談〕新吉原松葉屋瀨川

去年寶曆五の春、江戸町二丁目丁子や抱雛鶴と云名高き遊女、田所町山崎斗仙根引して廓を出

〔書言字考節用集〕四賣女

〔嬉遊笑覽九娼妓〕隠れて色を鬻ぐ者を、漢土にも後世娼妓天下に滿つ、兩京の教坊官其税を收むるを脂粉錢と云、郡縣に隸する者を樂戸と云て、使令に隨ふ、唐宋の代、官伎をもて酒宴の佐とす、明の代になりても然ありしが、宣徳の初めに至りて、始めてこれを禁せられて、公庭に出るこ

隱賣女